ワークショップ・意見交換会

2020 年 2 月 3 日（月）～2 月 6 日（木）

趣旨

参加者が日本の文化財の取扱いや保存に慣れ親しむことと、参加者同士のネットワークを形成することを目的として、ワークショップを開催しています。今回は、東京国立博物館・京都国立博物館での文化財取扱講座、京都市内でのエクスカーションを実施しました。参加者は、日本国外のミュージアムに所属しており、日本もしくは東洋美術の学芸員、日本美術を扱う機会のあるレジストラーやエデュケーター、展示デザイナーなどが対象となっています。

2 月 3 日（月）　会場：東京国立博物館

和服構造についてのワークショップ　　講師：菊池 理予（東京文化財研究所）

文化財取扱講座（書跡）　講師：丸山　猶計（東京国立博物館）

特別展「出雲と大和」観覧　　解説：品川　欣也（東京国立博物館）

2月4日（火）　会場：京都国立博物館

京都国立博物館事業紹介　　館長　佐々木　丞平　（京都国立博物館）

文化財取扱講座（刀剣・甲冑）　　講師：末兼　俊彦（京都国立博物館）、佐藤　寛介（東京国立博物館）

大本山東福寺　　解説：資料研究所所長　永井　慶州師

2月5日（水）　会場：京都市内

大徳寺 龍光院　　解説：住職 小堀 月浦師

大西清右衛門美術館　　解説：十六代 大西清右衛門氏

岡墨光堂株式会社　　解説：岡　岩太郎氏

千總文化研究所　　解説：加藤　結理子氏

2月6日（木）　意見交換会

会場

ホテル京阪京都グランデ　光林の間

議長兼進行

鬼頭智美　東京国立博物館　学芸企画部　上席研究員

出席者（敬称略）

(米国)

グウェン・アダムス	ロイヤルオンタリオ博物館
ローラ・アレン	サンフランシスコ・アジア美術館
ロジーナ・バックランド	ロイヤルオンタリオ博物館
フランク・フェルテンズ	フリーア美術館
ホリス・グッダール	ロサンゼルス・カウンティ美術館
アンドレアス・マークス	ミネアポリス美術館
アン・ニシムラ・モース	ボストン美術館
リアノン・パジェット	リングリング美術館
アーロン・リオ	メトロポリタン美術館
スティーブン・サレル	ホノルル美術館
篠田 弥生	ネルソン・アトキンス美術館
シネード・ヴィルバー	クリーブランド美術館

(欧州)

カーウィン・チェン	スコットランド国立博物館
ティモシー・クラーク	大英博物館
ルパート・フォークナー	ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館
メンノ・フィツキ	アムステルダム国立美術館
グレゴリー・アーヴィン	ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館
ダーン・コック	国立民族学博物館（ライデン）
ナデジャ・マイコワ	ピョートル大帝記念人類学民族学博物館（クンストカメラ）
マニュエラ・モスカティエッロ	チェルヌスキ美術館
ケイト・ニューナム	ブリストル市立美術館
メアリー・レッドファーン	チェスター・ビーティ
ウィブケ・シュラーペ	ハンブルク美術工芸博物館
アルバン・フォン・ストックハウゼン	ベルン歴史博物館
カーン・トリン	リートベルク美術館
エリザヴェータ・ヴェニアン	プーシキン美術館
バス・フェルバーク	ケルン東洋美術館

ミオ・ワキタ-エリス　　オーストリア応用美術館
コーラ・ビュルメル　　ドレスデン博物館
アイヌーラ・ユスーポワ　　プーシキン美術館

抄録

鬼頭　本日はフィードバックセッションということで、全体を通して皆様がどのように感じているのか、あるいは何か今後について要望や、スケジュールについてなど自由にお話しいただきたいと思います。
では、プログラムのスケジュールに沿って順に振り返っていこうと思います。
　まずシンポジウムについて、何かコメントはございませんか。

フィツキ　シンポジウムについて、主催者として観客の方がどのように関わるかそのポリシーを知りたいと思います。観衆の方からの質問を一つ選びましたが、実際にはもっと関わることがあると思います。シンポジウムのゴールは何でしょうか。一般向けのシンポジウムということでしたが、われわれもためでもありますが、そのバランスはどのように考えていたのでしょうか。

鬼頭　昨年のテーマは「オリエンタリズム・オクシデンタリズムを超えて」でした。私たちは再び一般の方々に向けて、日本美術は単一の観点からだけ見るものではないということを伝えたかった、また、私たち自身が日本美術をどう見ているのかということについて話し合う機会もなかったので、アメリカとヨーロッパの日本美術の専門家の方々がどういう観点なのかという点を共有し、それを一般の方々の前に示すことで、東京国立博物館においては時に「これが日本」とか「これが日本美術」というふうに簡単に示すことを求められますが、それほど単純ではありません。そして日本美術全体について言えば、多様に定義できるので、一般に向けて、日本美術というものがただ単に一つの見方だけに基づくものではなくて、多角的な観点から見るべきであるということを示したかったのです。

河野　日本では今、たくさんの外国の方々が博物館にやってきております。その中にはアジアの人もいらっしゃいますし、欧米の人もいらっしゃいます。そういう中で、日本美術という言葉もすごく抽象的な概念ですし、それを見ていただく観客の方も多様です。
　その中で博物館の我々は何をすべきかと考えたとき、私が最も伝えたかったのは「『モノ』を通じた『歴史』と現代との対話を真摯に紡いでゆく場がミュージアムです」ということです。この言葉を大事にして、観客の方との対話、作品との対話を今後も続けていきたいという意味を込めて、私はこのシンポジウムを企画しました。

パジェット　私が２年前に参加したときは一般の方からの質問を受けたと思いますが、そのやり方に戻ってはどうでしょうか。質問を募っても何も出てこないで場が白けることもあるので難しいとは思います。しかし、話しているとき最初の２列目までは知り合いでその後ろの暗いところに知らない人がいます。われわれは彼らに向けてシンポジウムをしているのです。彼らをもっと見えるようにして、私たち学芸員と彼らつまり一般大衆というわれわれが陥りがちな区別をなくした方がよいのではと思いました。

ユスーポワ　昨年のシンポジウムは最後に行われたので、非常にハードだったのですけれども、今年は最初にシンポジウムがあり、それから専門家会議だったので、この順番のほうがいいと思います。発表する人にとっても、その後の旅行を楽しめるので、この順番のほうがいいと私は感じました。

モース　シンポジウムを最初にやるのが良いというのは、楽しめるからという面だけでなありません。既に発表

をしているので、それについて共に過ごす残りの間いろいろと話ができます。

モスカティエッロ　初めて参加をしましたが、ワークショップなど特に京都でのプログラムはすばらしかったと思います。

　シンポジウムに関しては、私は昨年来ていませんが、アイヌーラさんや皆さんと同じ意見です。スピーカーの数がもう少し多ければ、そして扱うテーマも多ければいいかとも思いました。時間が少し短くなるかもしれませんが。

鬼頭　では、専門家会議の話題に移ります。今回会議のフォーマットを大きく変えました。過去の会議ではフランクな議論があまりできませんでした。私が最初にこの会議を計画したときは、皆さんは日本美術の専門家なので、学芸員同士いろいろな問題を共有し、共通の問題に関して議論をするとよいと思いました。最初はワークショップの参加者は入っていませんでしたが、今回は皆さん入っていただき、いろいろな視点をほかの人と共有し合うことにしました。今年はフォーマットを大きく変え、セッティングも変えています。発表をしてもらい、それからそれに基づく議論をする、ということにしました。そして話しやすくなるようなるべくレベルの高いマネジャーの人は入れないということにしました。目的はフランクな議論をしたいということです。

コック　その計画どおりにうまくいったと思います。議論するのに同じ方を向いてというのは難しいと思いますが、それほど問題ではなかったと思います。まず短いプレゼンテーションを最初に行い、それから議論をするというのがいいと思います。短く課題についての発表があって、その上で議論をするというのはよかったと思います。発表者もよかったと思います。

鬼頭　プレゼンテーションしてくださった方々、ご協力に感謝します。

シュラーペ　私も新しいセッティングはよかったと思います。2時間の議論の間に休憩は必要なかったと思います。シンポジウムについてはわれわれの間ですでに多くの議論をしていましたので、一般の前で話したことは再び話さなくてもいいと思います。最初の部分をできるだけ短くして、前日のシンポジウムについてほんの短いフィードバックをすればよいと思います。また、各議論のための発表は 10 分ほどで十分だと思います。間に休憩なしでより多くの議題について話し合うほうが良いと思います。2時間程度であれば、間に休憩なしでも議論できると思います。

ユスーポワ　吉田先生の基調講演はとてもよかったと思います。去年は基調講演がなかったですよね。美術史家ではない専門家からの特別な視点のお話しはとても興味深かったですし、同じ主題で発表もあってよかったです。専門家の基調講演は重要だと思います。

鬼頭　基調講演ですが、2回目の会議以降やっていなかったのですが、基調講演をやったほうがいいでしょうか。発表の数を増やすとすると、60 分の基調講演は長過ぎるでしょうか。

アーヴィン　より短い基調講演のほうが簡潔で効率的だと思います。要点をぱっぱと述べてすぐ終わりとし、関連事項を挙げ、より多くの人が参加するといいと思います。休憩に関して、議論が盛り上がったら続けたほうがいいと思います。柔軟性が必要だと思います。かっちりと決めた枠組みではなくということです。せっかくのはずみがついているときにはそれを継続したほうがいいと思います。

フォークナー　日本では基調講演者がほかのスピーカーより長い時間を割りあてて敬意を表するというのがよくあると思いますが、ヨーロッパの私の経験から、もしかしたらアメリカでも、それはあまりうまくいかないと思います。経緯は時間の長さで表す必要はないと思います。

ヴィルバー　より多くの短いプレゼンがいいという方が多いようですが、私は逆の意見です。私の合理性からすると、今日なかなか長い時間議論を続けるということが少なくなってきています。長い新聞記事がなくなっているのと同じです。効率的で要点がわかりやすいことが優先されがちですが、もう少し時間をかけて議論ができればと思います。私は長いフォーマットのほうがいいと思います。

バックランド　一般の方々は一つのテーマだけで長い議論をしてもついていけなくなると思います。ですからもっととっつきやすいようなもののほうがいいと思います。もちろんそういう発表を私自身は聞きたいと思いますけれども、それには違った場があると思います。また、このディスカッションはだんだんスローダウンしてきています。発言するまでにほんの数秒待つわけですが、その間に何か自分がちゃんとマイクをとるに値することを言わなければということを感じるのです。以前の専門家会議では、マイクがみんなの前にあり、スイッチを入れる時間はあるにせよ、もっとすぐに本当の議論ができるように思います。本当によくなってきて異論も含めて皆議論を交わせるようになりました。皆が集まるのはとても貴重な機会で、これからも続けられるとよいと思います。

鬼頭　ありがとうございます。マイクは録音して後で報告書をつくらなければいけないので、どうしても必要になってきます。しかし、何らかの形でこれをうまくやる方法はあるかもしれません。検討します。

リンネ　以前会議室の設定は、参加者同士物理的な距離があって（机の）向こう側の人とはとても遠く感じましたが、今年は顔を合わさず縦に並ぶ形になりましたが、なんとなく近しく感じました。振り返って発言者のほうを見るという形はよかったと思います。お互いを近く感じましたしなんとなくうまくいったと思います。

鬼頭　次に、ワークショップについてです。まず東京での東文研のワークショップですがこちらについて、いかがでしたでしょうか。ワークショップは、日本美術の専門家で経験のある人ではなく若手の専門家や、専門でなくても業務上何らかの形で日本美術、文化に携わる人向けになっています。

ビュルメル　私は最初少し驚きました。というのは本当に折り紙をするのかと思ったからです。私は陶磁器の専門家ですが、このやり方はきものについて学ぶのには大変よいハンズオンのアプローチだったと思います。理論と実践のバランスが大変よく良い経験になりました。私は、ここで学んだことを私の美術館に持ち帰りたいと思います。日本の着物についてより多く学ぶのに特に来館者にとってこれはすばらしい方法と思います。

フォン・ストックハウゼン　こういった異なる分野を見るということは非常にいいと思います。ただグループの人数が多いということで、時間も限られて本当に深いところに入れなかったということを感じます。
　ですから例えば２つに分けて、どちらか選べるようにするとか、そこでもっとディスカッションができるようにするなど、よりワークショップ的な、ただ見るだけじゃなく参加できるような、そういったものがあればよかったのではないかと。もっと時間があればと思いました。

リンネ　ワークショップは日本美術に詳しくない人向けのもので、専門家会議を専門家向けとすることにいつも少々疑問を感じます。どのような美術館・博物館にいようと、自分の専門分野とそうでない分野の両方がありま

す。巻物を一日中見ているけれども着物を一度も畳んだことがない人もいれば、着物を毎日のように畳んでいるが巻物を一度も取り扱ったことがない人もいます。専門家であっても違うことをしているのです。陶磁器の入った箱の紐を結ぶのに慣れている人もいれば、作品は棚に箱なしでおいてまわりに砂袋を置く、という人もいて彼らは紐を結ぶ機会は普通ないしそれはその館のやり方なので構わないわけです。取扱い方は館ごとに違うので、伝統的なやり方を学びなおすことはよいことです。皆にとって良い練習になるので、専門家とそうでない人の区別をなくしたほうが良いと思います。

フェルバーク　賛成です。このプログラムは東京国立博物館で行うので、その内部の知識を知ることができるのはよい機会だと思います。またワークショップや昨日のエクスカーションとのバランスも非常によかったと思います。我々は皆日本美術に関係していますがそれぞれが別々の専門領域があるので、誰もが経験を積むことがあると思います。

ビュルベル　取り扱い実習、特に金工品のワークショップについてとても良いと思いました。実際に作った人と学ぶ機会は本当に特別なことです。作品について学ぶ素晴らしい方法だと思います。

ヴィルバー　私は去年を除いて毎年参加していますが、来るたびに多くのことを学びます。毎回違うことをワークショップで学ぶことができると感じているので、これに参加できるということは私の仕事にも非常に役に立ち、感謝しています。

マイコワ　皆さんがおっしゃっているように取り扱いのワークショップはよかったと思います。セミナーや発表ではただ聞いて話すだけですが、ワークショップでは違う感覚を使います。実際に自分が何かに触れる、自分の他の感覚を使うことで学びます。これはとても重要です。手で覚えたものは忘れないと思います。

サレル　ワークショップは私たちにとって方法や材料について近しく学ぶ機会になったと思います。また坐禅の体験も非常にすばらしい機会でした。坐禅の体験のため服装やどのように準備するかを前もって知らされていたのでよかったと思います。ワークショップに関しても同じように「きょうは染め物のワークショップでちょっと汚れるところに行くので、汚れてもいい服装で来てください」など、前もって知らせてもらうとよいと思います。私ども学芸員としては手を汚して作品制作について学ぶことはめったにありませんので、非常に貴重な経験になります。ですから将来、そういうこともちょっと考えていただければと思います。

シュラーペ　最初の質問に戻ると、ワークショップをより詳しくできるかの可能性、特に刀剣に関してどうでしょうか。刀剣のセッションは楽しかったのですが、私にとってはどのように刀剣をケアするのかが問題です。どのように展示するかはだいたい十分にわかっていると思いますが、手入れの仕方はよく知りません。油と粉を使うことは知っていましたが、どのようにやるかはわからないので、刀剣を自分で触ることはなるべくしないようにしています。この種のことをもう少し詳しく学べたらと思います。ここには自分の館で日本の作品を取り扱うためたくさん質問を持って参加します。もう少し詳しい内容にすれば、こうした問題のない人にとっても役立つと思います。私は染織品を取り扱う機会はあまりありませんが、昨年すばらしいセッションがあり、メンノ・フィツキさんは染織品の取り扱いセッションについて短いパワーポイントの資料を作って後日参加者に送ってくれました。そのおかげで今は染織品を取り扱う時に、その資料を参考に行うことができます。したがって、非常に扱いが難しいような作品について専門家としてどう扱うか、もう少し詳しく学べたらと思いました。

アーヴィン　あなたの質問は私がやっていることに直接つながります。私は V&A で精いっぱい刀の世話をして

います。私がきれいにして油を塗ります。ここで言いたいのは、どのように引き継ぐかということです。ずいぶん前、大英博物館で初めて刀剣の手入れを任されたとき、本当に怖かったです。でも 30 年もたつと、自信をもってできます。Ｖ＆Ａの若い同僚にも教えましたが、初めは本当にみんな扱うのを怖がります。したがって問題は、我々が何十年もかけて得た知識を、次の世代やほかの人たちにどのように伝えるのか、どのように引き継ぐかということだと思います。

ニューハム　技術を学ぶ機会というのは常にすばらしいと思います。友禅染めの着物についての講義はとてもすばらしかったです。いろいろな段階、プロセスがあるということを学ぶことができたし、自分の館の来館者に伝えることができると思います。これは実現するには大変だと思いますが、実際に自分で線を描いてみることができたらもっと素晴らしいと思います。ただ読むだけではなくて、実際にそれを見て自分でやってみるということで、ものすごく知識と経験が深まると思います。テクニックを学ぶということは非常に有用なことだと思います。これらのワークショップに感謝したいと思います。

鬼頭　ではエクスカーションの話に移りたいと思います。スケジュールはちょっとタイトでしたか。皆さんはどう思われますか。

アーヴィン　タイトになったのは人数のせいだと思います。このような大勢で動くのは大変だと思います。

鬼頭　ことしは予算に余裕があったのでより多くの人を招待でき、専門家と専門家でない人との区別をしなくて済みました。全員専門家会議にも参加してもらい、何でも一緒にやりました。数が多かったので 2 班に分かれてということもありましたが。ワークショップでも専門家とそうでない人は分けるべきかという意見もあると思います。この数の問題は解決するのは難しいと思います。

シュラーペ　プログラムのおかげで通常では行けないようなお寺にも行けましたし今年のエクスカーションはとても楽しかったです。少し疲れた時もあったので、途中にコーヒーブレークがあってもいいかもしれないと思いました。そして経験ある学芸員とそうでない学芸員が一緒になって大勢でまわるということについて、そうしてくれたことに感謝します。4 年前学芸補佐として初めて参加した時、初めてベテランの学芸員と会って、とても恥ずかしくてなかなかお話ができなかったことを覚えています。経験上慣れるのに少し時間がかかると思います。ですから何度も参加するうちお互い近況を話すようになり、経験の浅い人と深い人が継続してネットワークを築いていけるのは良いことだと思います。

マイコワ　行ったことがないところに行けるというのはとてもすばらしかったし、作品をもともとの環境の中で見られるのはすばらしいと思いました。作品が博物館に収蔵されると、しまっておいて実際に使ったりはできず、どのように実際使われたかを忘れてしまうこともあります。それが生活のなかでどのような存在であったかわからなくなります。しかし、人々の生活の中でそれらがどのように使われたかを思うよい機会となりました。

コック　昨日、坐禅の際和尚様がおっしゃった言葉が印象に残っています。「今日私たちは狩野探幽の絵に囲まれていますが、今日は見ないでください。今朝はそのためにここにいるのではありません。見たければ、また今度見に来てください」とおっしゃいました。このグループにはぴったりな言葉で、全体として非常に深淵な経験ができたと思います。普段宗教には皮肉な態度ですが、きのうは本当に特別な日だったと思います。われわれは、龍安寺とか、そういうところには行ったことがありますが、旅行者が見ることのない、お寺の本当の修行の様子を知ることができたのはすばらしいと思います。

フォン・ストックハウゼン　このプログラムには私も初めて参加しました。特に私のように、コレクション全体を管轄していて日本美術の専門ではない者からすると、このプログラムは、当館のコレクションについてもっと知ってもらい、私が参加することのなかったネットワークに入ることができ、とても役に立ちます。特に小さい館にとってこのプログラムは有効だと思います。

シノダ　私はこの中で一番経験も知識の少ないのと思います。私は日本出身であるにもかかわらず、ここで専門家の方々からたくさんのことを学ばせていただく機会を得て、私にとってもすばらしい経験です。このプログラムは本当にすばらしいと思います。皆様にお会いできて、本当にいい経験になりましたし、もっと経験を積みたいというような将来への希望を持つことができました。

フェルバーク　もう一度プログラム、特に京都でのものが長かったかどうかという話に戻りますと、確かに長かったです。しかし時間が限られている中で価値のあるプログラムでした。どれも非常に特別なロケーションでしたし、本当にたくさんの場所を訪れましたけれども、せかされるような感じはありませんでした。非常にオーガナイズされていた印象です。9時から6時という長い時間でしたけれども、恐らく私たち全員がすばらしい経験をさせていただいたと思います。これにほかのやり方があるかどうかと考えても思いつきません。非常にすばらしいバランスだったと思います。時には疲れているような方もいて、私自身もそういうときもありましたがよかったと思います。

鬼頭　このプログラムの開催時期について伺います。通常このプログラムを1月の終わりか2月の初めごろに行いますが、これは予算の決定が7月頃なのでこのプログラムを1年の前半に行うのは不可能ですが、この時期というのは皆様のスケジュール上どうでしょうか。

フェルバーク　完璧です。1月、あるいは2月の頭というのは一番理想的な時期だと思います。なぜなら、観光客が少ないというのが一つと、統計によると一番湿度が低い時期だからです。天気も良かったです。

バックランド　日本で同業の皆さんに会う機会についてですが、山中商会でのレセプションは、本当に特別な場所での特別なイベントでベテランにとっても若手にとっても新しい仲間に会うよい機会でした。INJA のイベントもよかったです。将来もっと INJA が強化されれば、この事業と同時期に開催して新しい人と出会える場になるとよいと思います。

レッドファーン　この時点まで自己紹介をしていませんね。この参加者リストの中に 2-3 行何をしている人か、専門は何か、できれば顔写真もあれば助かると思います。これだけの人数になりますと、全員と話をする機会はありませんので、この人はこの専門家ということがわかれば、例えば私たちが持っているもので、あまり興味のなかったものでも、もしかしたら別の人は興味があるかもしれないといったこともわかります。簡単なものでいいですので一人一人のバックグラウンドが何か書いてあれば、非常に助かります。

米沢　私は東博側ではない人間としてずっとこのプログラムに参加している今回は唯一の日本側の参加者だと思うのですけれども、日本側の単なる参加者、主催者側ではなくてただ来て皆さんと交流する機会を持っている日本側の参加者が少な過ぎるのではないかと思います。東博の人でももっと若い研究員で、こういうプログラムで、こういうフィードバックセッションとかシンポジウムとか専門家会議に参加して、その議論の内容をもっと聞いて自分の意見を言うような立場の人が少ないと思います。もちろん懇親会などが用意されていましたが、こういう議論の場に日本人の参加者が少ないのではないのかなと思います。これは東博にとっても大変重要なプロ

ジェクトだと思うので、こういうことをやることで、東博側にどんなメリットがあるのか、積み重ねて東博にどんなことがフィードバックされていっているのかというのを、若い研究員に考えてもらう機会にしたらいいのではないかと思います。

鬼頭　このイベントは東博だけが主催しているのではなく、法人全体、国立の４つの博物館、研究所によるプログラムであるということになっていますので、より多くの日本人の学芸員にも参加してもらおうと思っています。機構だけでなく、それ以外の日本のミュージアムの方にも参加していただけるようにしたいと思います。

サレル　INJA と彼らが作成しているデータベースに関して話していただきありがとうございました。シンポジウムは、お互いの結びつきをつくり、専門の問題に関して連絡をとりあう関係づくりに素晴らしい機会だと思います。ＩＮＪＡ（the International Network for Japanese Art）というものを初めて聞いて、すぐに登録しようとしましたし、ウエブサイトはまだ調整中ということでしたが、ここにはシンポジウムと関連する情報がありますので、その情報をお互いに共有できると思います。ＩＮＪＡに加えて、そういったことが総合的につながればすばらしいと思います。

リオ　コンタクト情報、個人の詳細について知らせるということについてですが、今年の参加だけではなくて、６年間の参加者たちとお互いに即アクセスができるようになれたらとてもいいと思います。私としては、非常に思慮に富んだワークショップなどのプログラムで多様性にも富み、歴史にしても場所にしても多彩でした。
また、どこに行くのか、何をするのか、前もって知らせていただければとても役に立つと思います。例えば茶釜の美術館に行くと知っていれば、前もって準備をしておくということもできると思います。ワークショップにしても、掛軸のワークショップがあるということを知っていれば、「これについて聞きたいので、ワークショップではここもカバーしていただけませんか」と前もって要求するということもできると思うので、そうしたらより豊かなプログラムになるかもしれないと思います。

アダムス　収蔵庫を見せていただくような機会があればいいと思います。お寺で屏風や襖絵をどのように保管しているのかみせていただいたのは、とてもありがたかったです。

河野　来年は九州国立博物館がこの事業のカウンターパートです。九州国立博物館は、開館のときから収蔵庫の一部を公開しております。木材の中心の部分のみを使って――外側は虫が食っていますので――そこだけで全面を構成した収蔵庫を公開しておりますので、そういうところもごらんいただいて、日本人が過去の文化財を未来へ守り伝えるということも感じていただけるような機会を設けることができればいいなと思います。

モース　プログラムを九州で行うのであれば、トランスカルチュラルな展示について話ができると思います。九州国立博物館はとてもうまくそういう展示をしているので。

シュラーペ　この方向にいくのであれば、専門家会議でトランスカルチュラルな関係について話せると思います。このグループでアジア美術との関係を話すのは、我々はほとんど日本の同僚と会っている欧米人なので少し一方的のように思います。特に九州で行うのであれば、中国、台湾、韓国の仲間たちに来てもらって、アジア内での多様な物語について話しをしてもらうことは可能でしょうか。日本以外の東アジアにも日本美術のコレクションがあり学芸員もいるので、トランスカルチャーの文脈で彼らに話をしてもらえればよいのではないかと思います。
　来年のプログラムについてもう一つ私から提案したいのは、コレクションを展覧会だけでなく、もっと幅広く活用する方法、例えばオンライン・コレクションについてはどうでしょうか。どうしたらオンライン・コレクシ

ョンと展示とが相互に補完するような形で使えるでしょう。これはわれわれが皆直面している課題だと思います。ミュージアムとしての新しい役割は何でしょうか。デジタルな素材を持つ機会とは何か、それらはわれわれの日常業務や展覧会をどう補完するのか。これはわれわれが誰に伝えようとしているのか、学芸員としてわれわれの業務は何のためか、という疑問でもあります。われわれは作品保存し、より多くの人に伝えようとしていますが、展覧会はこの試みの一つでしかないのです。今のところ展覧会にばかり目が向いています。展覧会の中のデジタル素材についてだけではなく、特別展を超えていかにコレクションを活用していくか、などにも目を向けてみたいと思います。われわれは収蔵品を展示の中で、オンラインで、または常設展でどのように活用していけるでしょうか。日本美術コレクションの概要をデジタル化するのは、日本の学芸員にとってもわれわれのオンライン・コレクションにアクセスするよい機会となります。コレクションの活用という問題は、データベースに来歴の情報をオンラインでどのように入れるか、展覧会ではどうするか、などさまざまな課題に関連します。
また教育プログラムをオンライン・コレクションだけでなく展覧会の中にどう入れるか、という課題もあります。

ニューハム　九州ということならば、福岡アジア美術館とつながりができれば素晴らしいと思います。彼らは、トランスカルチュラルな現代アジア美術という面で素晴らしい仕事をしていますし、アジア全体の現代美術見ることで先駆的ですし優れたコレクションがあり素晴らしいトリエンナーレも開催しています。

サレル　日本の南部ということであれば、私が今回のシンポジウムで一つ足りなかったと思うのは、国の現状のようなことで、首里城焼失など日本美術の現状に影響を与えた出来事についての報告です。他の日本美術史のフォーラムにおいては、この出来事について、またそれが研究者や研究所などの計画どのように影響するか多くの話し合いがされています。

鬼頭　私たちは、今、ご提案いただいたワークショップについて、プログラムの構成について、また参加者がどうするべきかといことについて来年に向けて考えていきたいと思います。来年はもっとよいプログラムにするよう検討いたします。ありがとうございました。皆様、次は九州でお会いしましょう。